

金研

先達との出逢い

きんけん
ものがたり

物語

「追憶—大日方^{お び}一司^{な た か ず し}先生」

和泉 修

私が初めて大日方先生にお目にかかったのは、1949年(昭和24年)の早春のことです。金属工学科最終学年を迎え、私共は卒業研究のための所属研究室を決めねばなりません。「東北大学の思い出に、あの本多光太郎の余韻に触れてみようではないか」との級友の誘いに応じ、五十嵐勇教授をお願いして、金研の大日方先生に紹介していただきました。

大日方教授室は金研1号館(赤レンガ)の2階にありました。薄暗い廊下、狭い階段を経て、私共は教授室の前に立ちました。緊張の一瞬でした。しかし、私共を招き入れた先生の第一印象は、誠に柔和かつ洗練された紳士の姿でした。先生は、快く私共の希望を受け入れて下さいました。

大日方先生は1940年、本多先生の招聘に応じ旅順工大から金研教授として仙台に来られました。時あたかも戦時下であり、物資不足とあって軽合金開発研究の御苦労は並々ならぬものと推察されます。先生は、旅順工大時代からの遠心力を利用する不純アルミニウム精製(遠心分離)の研究や、高強度アルミニウム(HD合金)の開発に多大の貢献をされました。また、先生が刊行された『X線金相学』は、先駆的著作として高い評価を受けました。

当時の大日方研究室の構成メンバーは、柳原 正(のち金材研)、小松 登(豊田中研)の助教授2名、寺沢正式、日景武夫(群馬大)、三浦維四(東京医歯大)、山路賢吉(日立電線)の助手4名、および雇員、秘書で、それに卒業研究の学生である中村善一郎、吉野 泰、和泉 修の3名が加わりました。何しろ終戦直後のどん底の時代であり、測定装置の老朽化、研究資材の欠乏、電圧低下や停電の頻発は想像を絶するものがありました。しかし、研究室の雰囲気は明るく、研究討論や輪講が積極的に行われました。今にして思うと、あの時代に活力ある日常を続けられたのは、大日方先生の卓越した指導力とお人柄によるものでしょう。

卒業研究の1年間は瞬く間に過ぎ去りました。一緒の級友は企業に巣立ちましたが、私自身は川崎正之研究室の助手として金研に残ることとなりました。この川崎研究室は大日方研究室と同階にあり、主として銅合金を研究し、同じ非鉄材料であることから、研究活動も大日方研究室と一心同体でした。やがて



金研は工業化研究部の拡充に力を入れ、川崎研究室も金属加工部門に替わり、新築された3号館東側2階に大日方研究室と共に移りました。川崎助教授は五十嵐勇教授後任として工学部教室に栄転し、金研の金属加工部門の担当として鳥羽安行教授、そして田中英八郎教授へと引き継がれ、現在の花田修治教授へ至っています。

1957年、大日方先生は増本量所長の後を継ぎ、金研所長の座に就かれました。上

述の如く金研はまさに躍動期に入り、大日方先生は所内の整備・充実のみならず急増する国内外の研究交流、国際会議に対し機敏に対応されました。しかし、この激務の所為でしょうか、先生の御健康は1963年頃より次第に蝕まれていきました。そして、入退院を繰り返されるようになったのです。1963年春には大学病院、1967年12月～翌年3月、1968年6月～翌年3月、1969年5月2日に厚生病院へ入院、5月17日に病状悪化・危篤、5月19日に死去されました。5月25日午後風雨の中、新寺小路林松院で葬儀が、夕方グランドホテルで追悼式が行われました。享年67才でした。その後、大学紛争が激化し、内ゲバ・建物封鎖・機動隊導入などが相次ぐようになりました。

大日方先生は非鉄材料の重鎮(昭和41年日本金属学会賞受賞)でしたが、音楽を愛され自らチェロを奏されました。また、酒も嗜まれ、私共も屢々酒席にお供しました。こんなことがありました。前述の1963年春の大学病院入院時、病状思わしくなく実は関係者で葬儀の準備まで始めたのでした。「今生の名残り」でしょうか、突然主治医は先生にブランデーを許しました。ベッドで独りグラスを傾ける先生のお姿・心境を察し、葬儀の打ち合せを続ける私共はやり切れない沈痛な思いでした。ところが、翌日から先生は快方に向かわれました。一同、呆気にとられたのでした。まもなく退院され、日常業務に復されました。1965年3月には国際会議出席のため渡欧。1966年5月には金研50周年式典および大日方先生退官記念行事を見事にこなされました。主治医のブランデーが酒を愛する先生の活力を甦らせたのでしょうか。

先生去って35年。さまざま思い出が去来します。唯々御冥福をお祈り申し上げる次第です。